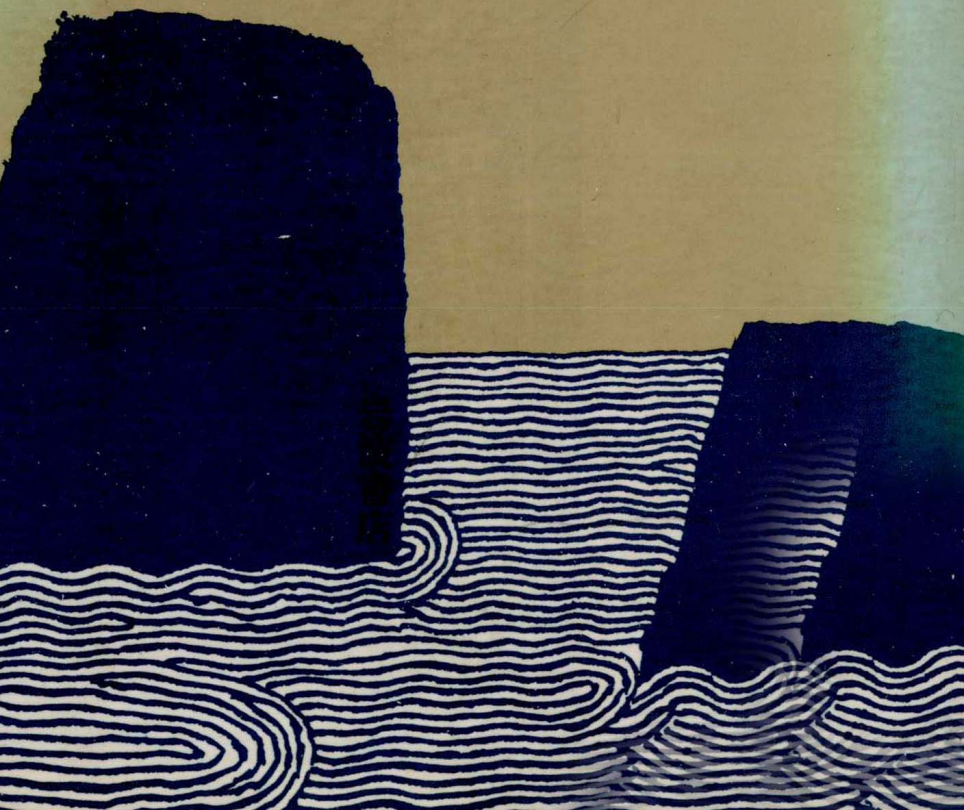
日本の詩歌

海とせせらぎ

大岡信対談集

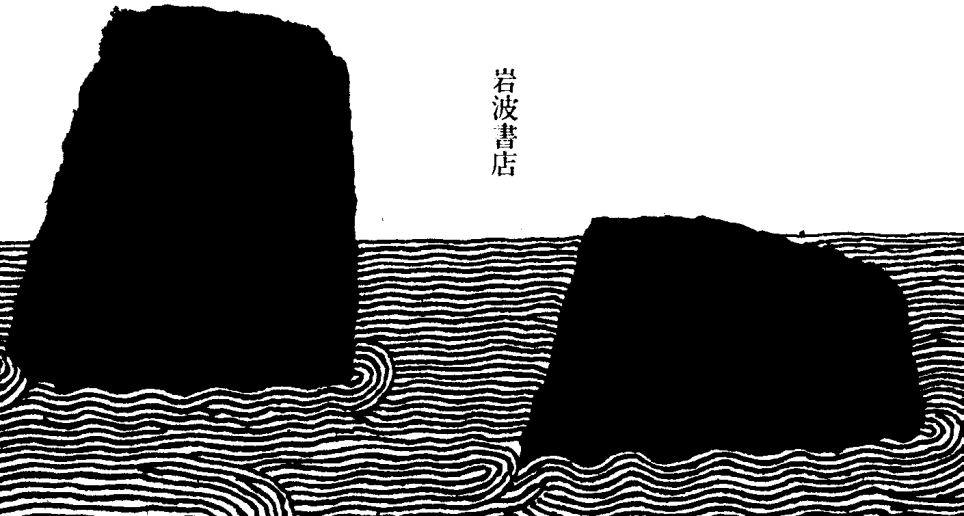


思潮社

日本の詩歌

海と せせらぎ

岩波書店



日本の詩歌　海とせせらぎ

一九八五年八月一四日　第一刷発行©

定価一八〇〇円

著者　大岡信（おおおか まこと）

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二ー五ー五
株式会社 岩波書店
電話 〇三ー二六五ー四一一一
振替 東京六ー二六二四〇

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-001653-9

目

次

日本の詩歌の流れ

『古今集』の歴史的新しさ……寺田透・奥村恒哉……五
中世という巨大なもの……丸谷才一・由良君美……三九
江戸俳諧を読む……飯田龍太・尾形仂……七三
批評の創造性……丸谷才一……一〇七

近現代詩をめぐって

詩的近代の位相をめぐって
——藤村・光太郎・朔太郎を中心に——……三好行雄……一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩・劇・ことば……木下順二……一七九

詩歌を読むたのしみ

歌のいのちを汲む……山本健吉……二一七
ことばは自然をどうとらえるか
——共鳴する詩と自然科学——……遠山啓……二四五
トポスとしての日本語……中村雄二郎……二六七
あとがき
初出一覧

日本の詩歌

海とせせらぎ

——大岡信対談集——

日本の詩歌の流れ

『古今集』の歴史的新しさ

寺田　透
奥村恒哉
大岡　信

「文学」一九六八年(昭四十三)十一月号が『古今集』についての小特集を編んだことがある。私はその号に「古今集の新しさ」という小論を発表した。あとにも先にも『古今集』について――というよりも平安朝和歌について――書いたのはこれが初めてだった。窪田空穂『古今和歌集評釈』などを頼りに手さぐりで王朝和歌の世界にわけ入り始めた当時のことだったから、自分の考えに多少とも見どころがあるものかどうか、まったく覚束ない思いだった。幸運なことに、私の小論に目をとめて下さった方々もあって、それに励まされ、三年後には『紀貫之』(一九七一・筑摩書房・日本詩人選)をまとめるところまでいった。『古今集』を曲りなりにも読んだことは、私にとっては日本の詩歌史全体を考える上で、ある決定的な経験となった。

さて、くだんの「文学」の『古今集』小特集には寺田透氏の「古今所感」も掲載されていた。これまた私にとっては軽からぬ意味を持つ出来事だった。寺田氏は私が旧制高校在学中に教室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でフランス語を教わった先生であり、その時以来その文学的業績に親しく接しつづけて現在にまでいたった、文字通りの私の先生である。フランス文学者である寺田氏が、早くから現代文学の批評を行うと同時に道元を論じ、万葉の歌について書き、歴史物語や源氏や古今について論じるのを見続けてきたことは、私にとって一つの大きな心の支えになっていたように思う。

奥村恒哉氏は『古今集の研究』(一九八〇・臨川書店)にまとめられた諸論で明らかなように、『古今集』の文献学的研究に重厚精緻な業績を重ねてきた学者である。『古今集』編纂の基本理念が律令官人の合理主義にもとづいており、普通いわれているような「たおやめぶり」ではなく、むしろ「ますらおぶり」の観点から『古今集』を見ないと理解できない点が多々あるという奥村氏の所論は、私にはこの座談会に参加する前から大層魅力的だった。座談会では司会役の私がおしゃべりしすぎて、慎重に言葉を選んで発言する奥村氏の貴重な見解をたくさんお聞きする機会を自ら摘みとってしまったきらいがあるのを、残念に思う。

一　新しい大和歌の創造

大岡　日頃ちょっと考えていることなどを申しあげて、話のきっかけにでもなればと思いますが、『古今集』についてはもちろん、昔からたいへんな研究が積み重ねられているんですが、一般的に言いますと、明治以後、どちらかといえば『古今集』よりも『万葉集』のほうが非常に大きな位置を占めてきたと言っていいんじゃないかと思うんです。

ある時期にはもちろん『古今集』についての集中的な関心というものがあった時期もあると思いますけれども、概して言えば『万葉集』に対する関心程には一般の間では『古今集』に対する関心は強くなかったような感じがします。

ところが最近『古今集』に対する関心が、漠然とした感じですけれども、強くなっているのではないかと思います。専門に研究する方も、またたとえば私のような、いわば素人的な立場で関心を持つという立場の人間も含めて、『古今集』について論じる人がふえてきた、という印象を持っているんです。それぞれの人にそれぞれの理由があると思いますけれども、私の場合などは、『古今集』というものに近年になって関心を持ちはじめた理由の一つは、『古今集』というものが、それ以前における中国からの非常に強い影響というものをいわば脱して、日本の文芸としての新しい自覚を持った時代の産物だという点に何といっても興味があります。

それは私の場合、明治以後の近代文学についての見方というものと重なっているところがありまして、つまり、近代文学における外国文学の影響ということですが、それをどのように日本の近代文学者が消化してきたか、ということ、とりわけ私の場合には現代詩の問題があるわけですけれども、これを考えているうちに、どうも『古今集』時代とある意味で非常に似通った問題をわれわれはかかえこんでいるのではないか、ということに気づいたわけです。

『古今集』の時代に、紀貫之をはじめとする人々が、中国の影響をなんとかして内面化しながら、そこに新しいやまとうたを作り出そうとして苦心惨憺の努力をしたと思いますけれども、そういう努力に、外側からだけではない一種身につまされる関心といったものを持つようになったわ

けで、私の場合には、これが紀貫之や『古今集』に対する関心というものにつながっていると思うのですね。

ただ皮肉なことに、明治以後は『古今集』の位置がある意味で言うと下落して、『万葉集』が非常に大きく復興してきた。そのへんに歴史の皮肉というのもあるかと思いますけれども、いずれにしても、日本の文学の現在の状態というものを考えてみると、『古今集』というのは、どうも大きな意味を持っているのではないかということを思うのですね。あれが出てからの日本文学というものは、それ以前の時代の文学とは、非常にはっきりと、いろんな意味でちがってきているし、風俗、習慣の中に及ぼした『古今集』の影響というものは巨大だ。そういうことをもう少しわれわれはきちんと、いろんな観点から考えていかなければならないのではないか、というふうに思うのです。

今日お話いただくお二方は、寺田さんは、いってみれば専門ではない立場で、しかし、近頃はおそるべき破壊力というか(笑)驚くべき迫力で、日本の古典文学のいろんなジャンルに筆を進められておられますし、奥村さんは、『古今集』、『後撰集』その他の歌集について、たいへん緻密でしかも鮮烈な鋭さをもった研究を着々と積み重ねておられます。そういう意味でいろいろと教えていただくことがあるだろうと思って楽しみにしているわけですが、差し当って寺田さんに、今こんなところが自分には関心がある、というところからお話いただけるとありがたいと思います。

寺田　僕は、大ざっぱに言えば、正岡子規の影響下にあってね、歌集として見たら『古今集』は退屈な歌集だとやっぱり思う。思うんだけれども、読みはじめると、一首一首みんな辿って最後まで行っちゃうわけよ。そうすると、ただことばだけで、色も形もなしに歌を作っているにもかかわらず、時々とてもさえた深みもある歌が出てきて、ヴァレリーが、たぶん『ペルシャ人の手紙』について言った批評だと思うけれども、血は流れるただし第二面で流れる、と言った、なんかそういうふうな第二面でだけれども、とてもなまなましいものを感じさせる歌がひょっと出てくる。そういう歌の作り方というものを、なかなか面白いと思うんですね。

そこで見つかるのは、一言でいえば、非常な新しさです。新しさというものは、だいたい相対的なもののはずなんだけれども、一人の人間が知恵の限りをしぼって組立てたものというものが持つ、絶対的な新しさというようなものね、

それが何か感じられる歌がある。それでやっぱり『古今集』というのは捨てがたい歌集だ、ということになるんですね。

ところがまた、坂上郎女などをやっていると、郎女というのは、一見読んで受取れることと、その歌を突っついているうちに出てくる意味がまるでちがうということがあるし、別の性格も出てくる。そういう経験をこんどかなりしたんですけど、そういう万葉末期の歌の作られ方から眺めると、『古今集』までそう遠くないということがあって、絶対的な新しさということもただ様式の問題だけでなく、素材に対する歌人の態度の問題だというようなことも考えられてくる。『古今集』のうちで一番古い、小町、業平にしたって、そっくり、万葉末期の歌人と同じだというわけにはいかない。万葉末期の歌風はそっちに向いていっているのにそうはいかない。そのわけを何かというと、『古今』になると素材に頼って歌を作るわりあいがずっと減っている、というようなことだろうと思うんです。

そういう、人工世界という意味で、この『古今集』は、とかく、いろんな文学表現が現実ばなれしない日本文学史の中で珍しい、注意されるものなんだと思います。

もう一つの現代詩との関係で言うと、明治からこっち、『万葉集』があんなに珍重されて来たけれど、じゃあ万葉風な詩があらわれたかというとそんなことはないし、明治の一番はじめの翻訳新体詩なんか野暮ったい古今調だと思えますよ。まして今の詩人となると、詩はことばで作るものだという自覚がとても強くなっている。その点で、意識するしないにかかわらず、『古今集』型だといえるんじゃないか、と僕は感じていて、そういう意味でも『古今集』は面白いというか、興味があるということですね。

大岡　前に寺田さんが、僕の詩について書いて下さったことがあったですけれども、その時の論の中にも、そういうお考えが出ていて、あ、これはもうおれはだめな詩人だと言われたんだ(笑)ということでがっかりしたことがありましたけれども、客観的に言うと、たしかに詩は、さきほどのお話で言えば、素材ではなくて、言葉で作るという、そういう考え方というのが、現代詩にははっきりと確立されてきていることだと思いますんでね。

寺田　そこにすこし丁寧に考えた方がいいことがはさまっていてね。どういうことかというと、蒲原有明なんか、そりゃたいへん言葉に苦労して詩を組み立てているけれど

も、だけどあそこではまだ、詩人の取り上げる素材がずいぶん大きな問題だったわけで、今はそれが大きなちがいだと思うんですね。

大岡　奥村さんはいかがでしょう。今『古今集』というものを問題にするという場合、どういう点がいちばん強い問題としておありですか。

奥村　『古今集』は、『古今集』自体をわれわれがそのまま読んだ場合と、それから、歴史的影響の諸要素、これがまたバカに大きいものですから、歴史的要素もそれはそれで面白いし、『古今集』自体もそれはそれでまた面白い。今まで、『古今集』は直接読まれずに、長い歴史の霧を透して読まれすぎたと思います。

それは両面ございますものですから、私のように文献学やっていますと、その歴史的様相を追いまわすほうが議論になりやすいものですから、そちらを追いまわすものですから。『古今集』そのものは、わが国の言葉で書いたものでは、比較的輪郭がはっきりしているので、藤原定家が、『近代秀歌』で、貫之は上手なれど余情妖艶の体を読まず、ということを言いまして、余情妖艶ということはあんまり考えない、単語は単語のまま使っているということ。そういうはっきりしたところが私は個人的には気に入っております。

大岡　前に『万葉集』というものがあり、後に『新古今集』というものがある。その中間に『古今集』がある。この位置は大変相対的なわけで、たとえば正岡子規の場合には、そういう『古今集』の位置のあいまいさが実に不徹底で不快だと感じていたと思いますけれども、しかし実際に考えてみると、たしかに貫之の時代の歌人たちは、言葉一つ一つを非常に正確に使っているという感じはしますですね。

奥村　はい、そう思います。

二　律令制官僚主義の精神

大岡　さきほどおっしゃったことで、今のこととも関連しますけれども、集としての輪郭が明確だということは、序文が前と後にあり、そして中に入っている歌そのものも、非常にきちんとした組立て方で並べられているわけですね。

『万葉集』の場合にはもちろん、構成それ自体がいくつもの層をなしていて『古今集』とはちがうわけですけれども、いったいあの時期に、なぜあんなにきちんとした歌集

が作られたのか。世界的に言ってもたいへんに珍しい詩集じゃないでしょうかね、そういう意味では。

奥村　あれほど明確にやったのは、勅撰詩集にも、漢詩集にも、あれほどはっきりしてないんですけれども、貫之の場合は、律令的精神をそのまんま、律令的な合理的な官僚主義というものを、そのまま持ってきての、歌集の編纂の態度にあらわれていると思いますし。歌そのものも、いきなり法律文書と比べるのはどうかと存じますけれども、『令義解』の序にも、律令は天地初発と共にはじまる、というようなことが書いてありまして、それは、『古今集』の真名序のはじめの書き出しとそっくりの書き出しをしている、というようなことやら、その律令的精神というようなことが、やはり規範になって、漢文の序で見たら、詔を以て撰したということで、詔を以て撰したらああいう格好にならざるを得ないだろうと思いますですね。

大岡　一般的に言いますと、『古今集』は、ますらおぶりではなくて、たおやめぶりだ、ということがいわれます。私はどうもそれはちがうんじゃないかと素人考えで思っていて、あれはむしろ、ますらおぶりの歌ではないかということを、まあ少々あらっぽいのですが書いたりしたこともあるんですけれども、今のお話だと、これはまったく、ますらおぶり、少なくともその出来上り方はそういうことですね。

奥村　はい、そう思います。

寺田　ますらおぶりと言ってしまうと、ますらおという言葉の語感が別にあるから変なことになるけどね。たしかにこれは、女の歌人ではっきり名前のあがっているのは、勘定すればもっとあるかもしれないけれども、まあ五、六人ですよね。一番たくさんのが伊勢、小町あたりでしょう。それから、「寵」という字で書いてある、女かもしれないそれだとか、典侍よるかの朝臣とか、そこらあたりが何首も回を重ねて出る女の歌人で、あとは典侍洽子（あまねいこ）とか白拍子しろめとか、それから誰某の母とか娘とか妹とか、そういうのが一首ずつ出るくらいのものですよね。名前のついてるのはたいてい男の歌人で。しかしよくよく見ると、よみ人しらず、の中に女の歌がたくさんある。よみ人しらずのかなり多くが女じゃないかと思うくらいです。そういう推定がかなり確実にできるのは、在原業平とやりとりした贈答歌のうちの女はみな、よみ人しらずにされていることね。そのよみ人しらずの歌をいくつか、男女、男女とやって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com